

## 紹介

日本史研究会編

### 『豊臣秀吉と京都』

——聚楽第・御土居と伏見城——

一九八〇年代以降の都市研究は、全国各地に多くの地方都市を発見し、再評価を与えてきた。なかでも、戦国・織豊期の都市は、統一政権の出現による政治・社会構造のダイナミックな変化を顕著に反映するとされ、多くの研究者の注目を集めてきた。しかし、当時日本最大の都市であった京都に関しては、地方都市と比して研究が進展してこなかった。このような現状をふまえて発刊された本書は、研究の盲点であった豊臣政権期の京都・伏見を対象とし、その都市構造に様々な角度からアプローチする論文を収めている。

第一部「秀吉と都市京都を読み解く」では、京都・伏見を政治史・都市史・城郭史の流れに位置づける論文から成る。冒頭の

高橋康夫「織田信長と京の城」は、足利義輝の城と織田信長・足利義昭の二条城の範囲や規模、内部施設を再検討する。その結果をふまえて、二条城・城下町は、分散的・二元的な中世の都市構造を一元化・統合し、近世的な都市空間へ再編する意義を持った先駆的かつ画期的なものであったと評価する。横田冬彦「豊臣政権と首都」は、諸大名の集住の達成を指標として秀吉の作った聚楽・伏見・大坂を比較考察する。そして聚楽・伏見は「公儀」の首都となったが、大坂は豊臣「家中」の城下町であり、両者を一元化できなかった点に豊臣政権の矛盾を指摘する。仁木宏「御土居」への道」は、畿内の城下町・寺内町における惣構が、地域住人の生命・財産を守る装置であり、その構築と維持には地域住人の意志が大きく関わっていることを論じる。統一政権は、地域の産物である惣構を積極的に採用していくことで、地域の正当な支配者となりえたとし、その視角の延長に京都の惣構である「御土居」を位置づける。前川要「惣構」の成立と展開」は、惣構を領主権力による公権力に裏打ちされた城下集住策の装置であったとみる。中井均「城郭

史からみた聚楽第と伏見城」は聚楽第と伏見城の城郭プランや施設を検討している。さて、従来の中世都市研究においては、文献史料のみならず考古学データ、古地図、地籍図等を駆使した景観復原の手法が発達した。その手法をふまえた上で、京都・伏見を対象として景観復原の再検討・精緻化を行った諸論文が、第二部「よみがえる豊臣期京都」、第三部「天下人の首都―伏見」に収載されている。

第二部では京都を対象とした論考が集められている。中村武生「豊臣政権の京都都市改造」は、秀吉の京都改造事業である、寺町の設定、長方形街区（天正地割）の設定、惣構（御土居堀）の構築について、新たな資料をもとに旧説を再検討する。豊臣期の御土居堀の実態に関しては、考古学的な成果も得られており、丸川義弘「御土居の発掘調査」に紹介されている。森島康雄「聚楽第と城下町」は、最近の発掘調査をふまえて聚楽第の位置と規模を推定している。さらに、聚楽第の東に立地した大名屋敷地区が、聚楽第築城以降の屋敷替えによって成立したものであることを指摘する。百瀬正恒「聚楽第の築城と都市の発展」は、

聚楽第内部の建築物の構成や聚楽第城下町の形態を復原するものである。先の森島論文と復原対象が重なっており、両者の復原案の比較検討を期待したい。聚楽第破却後の近世に聚楽第跡及び大名屋敷街、聚楽町がどのような変化を辿ったのかについては、杉森哲也「江戸時代の聚楽第跡」に詳しい。

また、近藤知子「方広寺跡の発掘調査」では、豊臣政権の手がけたもう一つの大規模な建造物である方広寺の伽藍復原がなされている。

第三部では伏見の景観復原に関わる研究が収載される。発掘調査の成果から、伏見城・城下町の変遷を考察したのが、森島康雄「考古学からみた伏見城・城下町」である。森島は、豊臣期指月城から豊臣期木幡城への移転と同時期に、木幡山西側において大規模な整地事業と町割りがなされたことを指摘している。山田邦和「伏見城とその城下町の復元」は、近世・近代に描かれた縄張り図や城下町絵図の史料批判を丁寧に行った上で、それらを可能な限り伏見城・城下町の復原に利用した。その結果として山田は、豊臣期・徳川期の木幡城・城下町復元図、豊臣期指月城および向島城復

元図を提示した。伊東宗裕「江戸時代の伏見」では、近世伏見が陸上・水上交通の結節点に位置するという地理的条件から、経済機能を持続・発展させたことを述べる。

このように本書は、従来の都市研究を十分に摂取したレベルで行われた、京都・伏見を対象とする研究を収載している。これらは京都を他都市と比較可能なレベルに引き上げる研究と評価できよう。さらに単に研究の真空地帯を埋めるに留まらず、既存の都市研究に再考を迫る見解も多い。例えば、従来は天正四年（一五七六）の信長の安土城下町建設をもつて、都市構造の一元化が達成されるとする見解が一般的であるが、高橋の見解ではそれより前の永祿二二年（一五六九）段階ですでに信長が京都・京都において都市構造の一元化を図っていたことを示す。また仁木は、惣構を生み出した先駆的な地域として畿内を位置づけるが、それは同じく惣構の見られる東国や東海・北陸の城下町の地域社会とはどのような相違があるのかという疑問をも提起する。京都で得られた成果をいかに地方都市への「逆照射」していくのか、本書はこれからの都市研究に課題を投げかけている。

(B5判 二四九頁 二〇〇一年二月)

文理閣 五二〇〇円)

(山村亜希 京都大学総合博物館助手)